

学校の校庭の銅像で有名な二宮金次郎に学ぶ

こうこう
● 孝行

にのみやきんじろう
二宮金次郎は、家が大そうびんぼうであった
ので、小さい時から、父母の手だすけをしました。
金次郎が十四の時、父がなくなりました。母はく



らしにこまって、すえの子をしんるいへあずけましたが、その子の
ことをしんぱいして、まいばんよくねむりませんでした。

金次郎は母の心を思いやって、「私が一しょうけんめいにはたらきま
すから、おとうとをつれもどして下さい」といいました。

母はよろこんで、そのばんすぐにしんるいの家へ行って、あづけた
子をつれてかえり、おや子いっしょにあつまってよろこびあいまし

た。 こう とく
孝は徳のはじめ。

●しごとにはげめ

金次郎は十二の時から父にかわって川ぶしんに出ました。しごとを
すまして、家へかえると夜おそくまでおきていて、わらじをつくり
ました。そうしてあくる朝、そのわらじをしごとばへもって行って
「私はまだ一人前のしごとが出来ませんので、皆さまのおせわにな
ります。これはそのお礼です」といって人々におくりました。

父がなくなってからは、朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぎをとって、それをうりました。又夜は、はなおをなったり、わらじをつくったりしてよくはたらきました。

●がくもん

金次郎は十六の時母をうしなしました。やがて二人のおとうとは母のさとに引き取られ、金次郎は「まんべえ」というおじの家へ行って、せわになりました。

金次郎はよくおじのいいつけをまもり、一にちはたらいて、夜になると、本をよみ、字をならい、さんじゅつ(さんすう)のけいこをしました。おじはあぶらがいるのをきらって、夜学をとめましたので、金次郎はじぶんであぶらなをつくり、そのたねを町へ持って行ってあぶらに取りかえ、毎ばんきべんきょうしました。おじが又「本をよむよりはうちのしごとをせよ」といいましたから、金次郎は夜おそくまで家のしごとをして、そのあとでがくもんをしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかえり、せいだしてはたらいて、のちにえらい人になりました。

(昭和2年刊 尋常小学修身書 卷三 文部省編より、適宜現代的に意識)